報　告

父親の育児に関する研究動向と今後の課題

牧野　孝俊[1)]，金泉志保美[1)]，伊豆　麻子[2)]，佐光　恵子[1)]

〔論文要旨〕

本研究の目的は，父親の育児に関する研究動向を概観し，父親の主体的な育児を支援するための今後の課題を検討することである。

医学中央雑誌 Web（ver.4）を用い，キーワードは「父親」，「育児」とし，検索期間は1993年から2009年の17年間における原著論文により検索を行った。ヒットした文献は計370件であったが，このうち本研究の目的にそって，研究対象者が父親であること，疾病や障害を持たない子どもの父親であることが確認できた27件を分析対象とした。

結果，研究内容は「育児参加」，「育児ストレス」，「母親との関わり」の３つに分類できた。また調査方法の課題としては，質問紙調査で母親を対象に測定することを目的に作成された尺度を用いていること，面接調査においては対象人数が少なく一般化に限界があることが明らかになった。これらの文献検討により，父親の育児研究の課題が明らかになり，今後父親の育児観を質的に明らかにする必要性が示唆された。

Key words：父親，育児

Ⅰ．はじめに

1992年の育児休業法を皮切りに男性の育児参加志向が勧められ，1999年には厚生省の「育児をしない男は父親と呼ばない」というキャンペーンポスターが大きな反響を呼んだ。しかし，現在の育児世代は非正規労働で社会的・経済的に不安定な者がいる一方で，正規労働者の中には長期労働で仕事以外の時間が足りない者がいるという状況であり，いまだに育児は女がすることという意識が根強く存在し，家事・育児役割ともに母親中心である現状は否めない[1,2)]。

近年の日本における育児に関する研究においても，藤原らは，親と子どもの双方にとって，母子関係だけではなく父子関係の促進は，子どもが育っていくうえで重要な役割を果たし，家族関係の形成に功を奏する，と指摘している[3)]。また，中津川らによると，分娩後の入院中に父親へ向けて沐浴を中心とした育児指導を行い，退院後の育児参加状況を調査した結果，父親の育児参加が可能となり母親のストレスの軽減につながったと報告している[4)]。さらに，奈良間は家族を子どもの重要な存在として位置づけ，家族を中心とした看護のアプローチが有効であるとも指摘している[5)]。

これらのことから父親は，よい夫婦関係を築くことを通して母親の育児不安を軽減し，父親と母親が子どもに対して安定した愛着を形成することにより，乳幼児の基本的信頼感の獲得と深く関係しているため必要かつ重要な存在であると考える。

しかし，育児に関する父親の研究は，1993年第40回

Trends and Tasks in Research Concerning Father's Childcare　〔2239〕
受付 10. 5.13
採用 11. 7.29
Takatoshi Makino, Shiomi Kanaizumi, Asako Izu, Keiko Sakou
1）群馬大学大学院保健学研究科看護学講座（看護師/保健師/研究職）
2）新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科（看護師/保健師/研究職）
別刷請求先：牧野孝俊　群馬大学大学院保健学研究科看護学講座　〒371-8514 群馬県前橋市昭和町3-39-22
Tel/Fax：027-220-8775

Presented by Medical*Online

日本小児保健学会において庄司らが発表した「わが国における父親研究の動向―過去20年間の日本小児保健学会での研究発表の推移―」によると，最初の研究は1973年の母親を調査対象とした大塚の「父親の育児への協力度調査」であり，初めて父親を調査対象としたのは，1981年の窪らの「父親の育児に対する認識と実践について」であると報告しているが，その数は極めて少ない[6]。

父親がキーワードになっている研究が増加傾向にあるものの，多くの研究において研究対象者は母親であり，これまでの父親に関する研究で明らかにされている父親の育児に関する理論は，母親から捉えられた父親の意識や認識を基盤にして築かれてきたものと考えられる。また，父親を調査対象者にしている研究報告は希少であるため，父親がどのような育児観をもち，育児に関わっているのか具体的なところが不明である。

以上のことから本研究では，父親研究における研究動向と今後の課題を検討する。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は，父親研究における動向と今後の課題を検討することである。

Ⅲ．研究方法

1．対　象

1993年第40回日本小児保健学会において庄司ら[6]が発表した「わが国における父親研究の動向―過去20年間の日本小児保健学会での研究発表の推移―」以降，すなわち，1993年から2009年の17年間に発表された原著論文を，「医学中央雑誌 Web（ver.4）」を用い，キーワード「育児」，「父親」で検索を行った。その結果，文献は370件であった。父親研究の動向と今後の課題を検討するため，これらの文献から研究対象者が父親であること，疾病や障害を持たない子どもの父親であることが確認できた27件の原著論文を文献検討の対象とした（表1）。

2．分析方法

対象とした27件の文献を，文献検討シートを作成して整理し，年次別，内容別に分類し父親研究における動向と今後の課題について概観した。

Ⅳ．結　　果

1．年次別，職域別文献数

近年17年間の年次別の文献推移を図1に示す。研究者の職域別の文献は，看護医療系が26件（96％），教育系が1件（4％）で，医学系，福祉・保育，その他は0件であった（図1）。

2．父親を調査対象とした研究の動向と概要（表2）

i．研究方法

研究の対象者は父親で，その条件として6歳以下の乳幼児をもつ，または正期産の分娩をした産褥婦の夫，早期新生児の父親，1か月・4か月・1歳6か月児健診に来所した父親，両親学級や育児サークルに参加した父親，育児休業を取得した父親であった。

研究方法は，質問紙調査が22件（81.5％），面接調査が4件（14.8％），症例研究1件（3.7％）であった。また質問紙調査は対象者である父親に対して，日本語版 MAI 尺度[7,8]や Lazarus の理論による尺度[9,10]，花沢の対児感情評価尺度[11]，岩田らのストレス尺度[12]や大日向の愛着尺度[13]，エジンバラ産後うつ病自己評価尺度[14,15]が用いられたり，著者が独自に作成した質問群が用いられていた。

父親の育児に関する研究内容は，「育児参加」，「育児ストレス」，「母親との関わり」の3つに分類できた。以下，分類別に記述する。また本文中の○番号は分析対象の文献を示す。

ii．育児参加

父親の育児参加に関する内容は，父親の肯定的な感情や情動，子どもへの愛着形成の実態や関連要因に関するものであった。

父親が育児中に感じられる肯定的な情動の中心は「同情」，「安心」，「誇り」，「希望」であり，次いで「感謝」があげられ，「喜び」，「愛情」は少なかったと指摘されていた（②）。また，早期新生児期に父親がベビーマッサージを行うことは，わが子との時間や気持ちの共有に効果があると報告されている（⑪）。さらに，父親の子どもに対する感情は，分娩方法による影響があり，正常分娩群は帝王切開群よりも父子間の愛着が強いと報告されている（⑩）。

iii．育児ストレス

父親の育児ストレスに関する内容では，高い育児ストレッサーをもつ父親は逃避や回避の対処行動をとる

Presented by Medical*Online

表1　文献一覧

文献No	著　　者	発行年	Title	Journal	
①	清水尚子　住岡里永子　岸田真由記　他	2008	育児期における父親の育児ストレッサー，ストレス対処，ストレス反応の関連	京都府立医科大学看護学科紀要	Vol.17，p79-86
②	清水嘉子	2006	父親の育児ストレスの実態に関する研究	小児保健研究	Vol.65，No.1，p26-34
③	頭川典子	2008	乳児期における育児参加と虐待予防に対する父親の意識	小児保健研究	Vol.67，No.2，p403-410
④	光田咲子　村上明美	2002	初めて子どもを持つ父親の育児観	母性衛生	Vol.43，No.1，p67-72
⑤	清水嘉子	2008	父親の育児幸福感―育児に対する信念との関係―	母性衛生	Vol.48，No.4，p559-567
⑥	川上あずさ　牛尾禮子	2008	父親の育児に対する役割意識に関する要因とその支援方略	小児保健研究	Vol.67，No.3，p496-503
⑦	谷野祐子　小野恵美　朝比奈七緒　他	2007	父親に対する育児指導が母子退院１ヵ月後の父親の育児参加に与える影響	母性衛生	Vol.48，No.1，p90-96
⑧	小西秀代	2004	現代の父親の育児参加意欲に関する要因　０歳児の育児指導に対するニード	神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録	Vol.，No.29，p212-219
⑨	蛭田由美　寺内文敏　平山宗宏	2001	父親の子育て支援に関する研究	母性衛生	Vol.42，No.2，p386-393
⑩	田中恵子	1999	分娩後早期における父親の子どもに対する感情	母性衛生	Vol.40，No.2，p252-257
⑪	根本さや香　新山陽子	2009	父親の愛着形成の促進　ベビーマッサージの効果	日本看護学会論文集：母性看護	Vol.，No.39，p108-110
⑫	樋貝繁香　遠藤俊子　比江島欣慎　他	2008	生後１ヵ月の子どもをもつ父親の産後うつと関連要因	母性衛生	Vol.49，No.1，p79-86
⑬	柳原眞知子	2007	父親の育児参加の実態	天使大学紀要	Vol.7，No.，p47-56
⑭	岡本絹子	2005	１歳６ヵ月児をもつ父親の父親としての自己評価と生活状況	吉備国際大学保健科学部研究紀要	Vol.，No.10，p29-36
⑮	岡本絹子	2005	１歳６ヵ月児をもつ父親の父親としての自己評価に関連する要因	川崎医療福祉学会誌	Vol.15，No.1，p265-270
⑯	木村弘子　星田秀子　菊池千代子	2005	参加型両親学級の企画運営を通して　父親のニーズと満足感を考える	日本看護学会論文集：母性看護	Vol.，No.36，p９-11
⑰	岡本絹子	2005	１歳６か月児を持つ父親の抑うつ症状と関連要因	小児保健研究	Vol.64，No.4，p560-569
⑱	永森久美子　堀内成子　伊藤和宏	2005	少人数参加型の出産準備クラスに参加した男性の父親になっていく体験	日本助産学会誌	Vol.19，No.2，p28-38
⑲	高瀬佳苗　河口てる子	2005	３ヵ月児をもつ父親の育児行動と育児に関する学習および態度との関連	日本赤十字看護学会誌	Vol.5，No.1，p60-69
⑳	蛭田由美　平山宗宏	2000	父親の子育て支援に関する研究　首都圏を中心とした勤労者家族の調査から	日本保健福祉学会誌	Vol.7，No.1，p19-30
㉑	小野寺美紀子　吉田弘美　高野京子　他	2002	育児における父親の参加（第２報）　７年前と比較して	茨城県母性衛生学会誌	Vol.,No.22,p46-49
㉒	江口麻衣　畝本玲子　緒方美也子　他	2001	育児における父親の母親に対する情緒的支援について	福岡県立看護専門学校看護研究論文集	Vol.24，No.，p121-131
㉓	鈴木紀子　久納智子　藤原　郁	2008	父親の育児休業取得に伴う現状と課題	愛知母性衛生学会誌	Vol.，No.26，p83-87
㉔	大石百合子 鈴木かおり 鈴木さきゑ	2006	父親と児の早期接触における育児参加の実態調査	袋井市立袋井市民病院研究誌	Vol.，No.，p87-92
㉕	Yumi Hiruta Yumi Cho Eiko Nishino	2005	A STUDY ON THE PRESENT STATE OF CHILD CARE AND FAMILY LIFE OF FATHERS ― A comparative survey of Japanese and Korean residents in Japan in the Osaka area ―	日本保健福祉学会誌	Vol.47，No.3，p65-76
㉖	木村　薫　白井やよい　中村マリ	1994	夫立ち会い分娩についての意識調査（第３報）父親の育児参加と意識	日本看護学会集録25回母性看護	Vol.，No.，p21-23
㉗	真鍋えみ子　藤田峰子	1993	乳児を持つ父親の家事・育児行動に関する一考察	日本看護学会集録24回母性看護	Vol.，No.，p84-86

Presented by Medical*Online

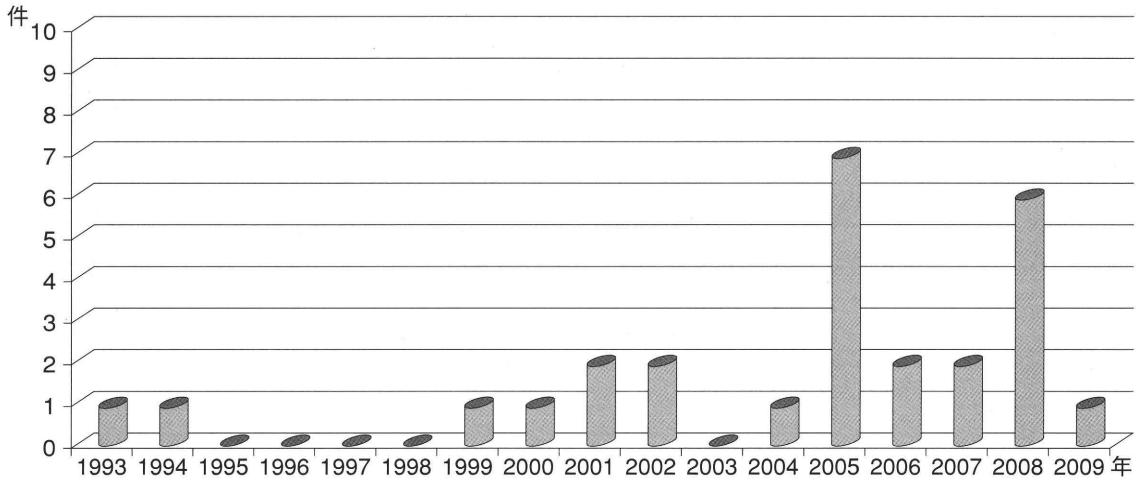

図1　父親の育児に関する文献数の推移

と報告されている（①）。また，父親の育児ストレスの要因は，子どもの自己本位的な特性に次いで，育児に関する自信のなさがあげられていた（②）。そして，父親の育児ストレスは，日頃父親が感じる生活上のストレスと関係していることも示唆された（⑮）。

さらに，父親の思いは，「育児経験のなさからくる不安」，「児が繊細であるための恐怖」，「仕事と育児の時間的アンバランス」，「外見と自己像の不一致」，「男性の育児参加の肯定」の5つのカテゴリーに分類されていた（④）。

iv．母親との関わり

父親の母親への関わりに関する内容では，父親たちが育児への積極的な姿勢を持っている反面，仕事のために十分に関われていないと葛藤を抱えていること，妻に対して育児負担を軽減したいと思っていること，育児を学びたいとの報告があった（③）。また，育児においても夫婦で協力することは，良好なコミュニケーションがとれているとの報告もみられた（㉒）。

v．先行研究で示された課題

先行研究における父親研究の課題は，対象者が少なく一般化には限界があること（⑪）やどのような父親であることを願っているのか，理想とする父親像を父親は自分自身で作り子どもに示そうとしているのか，などが不明であった（㉕）。

V．考　　察

1．父親研究における動向

本研究において，研究対象者が父親である文献27件を検討の対象とした。また，「父親」や「育児」をキーワードにした研究の93％は，研究対象者が母親であった。同様に，石田らは育児不安に関する先行研究において，対象者が父親である件数は母親である件数の10分の1に過ぎないと報告されている[16]。しかし，夫婦の育児に対する思いや養育態度にそれぞれ違いがあることや育児ストレスの内容が異なることが報告されているため[17~21]，父親の育児を明らかにするためには父親を対象とした研究が課題であると考える。

さらに，父親研究の研究方法として，日本語版MAI尺度[7,8]やLazarusの理論による尺度[9,10]，花沢の対児感情評価尺度[11]，岩田らのストレス尺度[12]や大日向の愛着尺度[13]，エジンバラ産後うつ病自己評価尺度[14,15]を用いて質問紙調査を父親に対して行われていた。これらの研究は数多くのデータを得て大規模な統計処理を行い一般的な傾向を把握するために質問紙調査が行われていると考えられるが，前述した尺度は母親のストレスや愛着，不安等を測定することを目的に作成された尺度であるため，父親の育児に関する研究結果として父親の育児支援を直接的に導くには信頼性・妥当性があるものとは言い難いと考える。さらに今後の課題において男性だからこそ悩み困ることがあるということを考慮すると，母親を対象として開発された尺度を父親に適応した量的研究には限界があると考える。このため，ほとんど研究されていない領域で現象のもつ複雑な内容を明らかにすることが可能な質的研究が，父親の育児に関する研究においては適切である可能性が示唆された。

これまでの父親を対象とした研究では，対象人数が少なく，研究結果を一般化するには困難であることや父親の育児観に労働時間や子育てに対して地域差があることが指摘されていた[22]。これらのことから，質的

Presented by Medical*Online

表2-1　父親の育児に関する現状と研究の課題

文献No	著　者	研究の対象	研究方法	結　　果	研究の課題
①	清水尚子 住岡里永子 岸田真由記 他	近畿圏の都市住居の1ヵ月から12ヵ月までの子どもを持つ父親56名	質問紙調査 1．属性①年齢②父親の兄弟の数③同居家族数と構成員④子どもの数と年齢⑤職業⑥妻の就業状況 2．日常生活①出勤時間および帰宅時間②休日の過ごし方③子どもと関わる時間 3．出産に関して①出産準備教室への参加の有無②立会い出産の経験と有無 4．第一子出生以前の子どもに対する経験と子どもや育児イメージ①第一子出生以前の子どもに対する感情5段階②子どものイメージ9項目③育児のイメージ8項目④2歳以下の乳幼児の世話の経験9項目について4段階で回答してもらい1～4点を配し，素点の合計を算出する 5．育児ストレッサー　岩田らのストレス尺度を参考に一部変更　6）育児ストレス対処行動　岩田らの対処測定尺度　7）心理ストレス　鈴木らの心理的ストレス反応尺度（SRS-18）	第一子出生前から子どもに対して肯定感情を抱いている人は育児ストレッサーが低い。育児ストレッサーの高い父親は逃避や回避の対処行動をとる。父親のストレス反応には育児ストレッサーが関与する。	父親の心理的ストレス反応を緩和するために，産業保健・地域保健とも連携した支援，夫婦間の育児に対する認識を話し合うような機会をもつように提案したり，父親が乳幼児の出すサインを受け止められるような，育児技術を習得できる機会を設定することが必要である。
②	清水嘉子	乳幼児期の子育てをしている父親100名。S市内2箇所の保育園に子どもをあずけている父親	質問紙調査 父親の年齢，子どもの数，家族形態，妻との会話頻度，家事育児時間に加え，父親が育児中に経験するネガティブな情動がいかなる事情のときに生じるかを自由記述法で収集。質問は，1）不安，2）恐怖，3）心配，4）怒り，5）イライラ，6）むなしさ，7）悲しみ，8）疲れ，9）不満の9つに分けて，各対象者にその程度について4段階（いつもある～全くない）で回答し，それぞれの思い起こした内容を記述 信念は，態度，努力，価値，役割，愛情に該当する項目を各1項目作成し，育児信念に対する考えとして2選択肢（賛成，反対），考えの強さとして5選択肢（絶対変わらない～絶対変わる）から選択	父親の感じる育児に伴う情動反応は「不安，恐怖，心配」の41.7%と「怒り，イライラ」の40.0%に二分された。父親の育児ストレスは9要因に分類され，「子どもの自己本位な特性」が最も多く，次いで「育児に対する自信のなさ」となった。育児信念との関係は育児信念6項目すべてを肯定する信念傾向を持つ父親は，不安を感じていた。育児信念に対して「こうあるべきだ」と考えるほど不安傾向は高かった。	記述なし
③	頭川典子	第一子が乳児期であった核家族世帯の父親3名	面接調査（半構成的面接法） 質問内容は，「出産前の気持ち」，「出産時の気持ち」，「育児に対する父親としての思いや考え」，「子ども虐待問題に対する意見」など	父親たちは育児への積極的な姿勢を持っている反面，仕事のために十分にかかわれていないと葛藤を抱えていること，妻に対して育児負担を軽減したいと思っていること，育児を学びたいという意識が明らかになった。虐待予防の点からも妻のストレス軽減が必要だと考えていることがわかった。しかし，育児にかかわる社会資源活用についての意見はなかった。	父親の育児参加に対する社会全体の理解を促進していくと共に，核家族世帯が社会資源を活用できるようにしていくことが虐待予防につながると考えられる。
④	光田咲子 村上明美	産褥5～7日の初産褥婦の夫5名	面接調査（半構造的面接法） これから始まる育児に対してどのような思いを抱いているのかを自由に語ってもらう。20～30分程度	父親の思いは「育児経験のなさからくる不安」，「児が繊細であるための恐怖」，「仕事と育児の時間的アンバランス」，「外見と自己像の不一致」，「男性の育児参加の肯定」の5つのカテゴリーに分類された。	父親がその時最も求めている事柄を察知し，積極的に育児参加できるような育児支援の方略を考えていく必要性が示唆された。
⑤	清水嘉子	6歳以下の乳幼児をもつ父親250名	質問紙調査 1）対象者の属性　（父親の年齢，子どもの数，育児に対する考え（育児信念）やその強さ） 2）調査内容　信念の基本概念として考えられている態度，努力，価値，役割，愛情に該当する項目を各1項目ずつ作成（ただし，愛情については，さらに1項目追加し6項目とした） 育児信念6項目に対する考えとして2選択肢（賛成　反対），考えの強さとして5選択肢（絶対変わらない　たぶん変わる　わからない　たぶん変わる　絶対変わる）とした。 父親が育児中に経験する肯定的な情動についてLazarusの理論による7項目に着目し，（①安心②希望③愛情④喜び⑤感謝⑥同情⑦誇り），各項目に対する頻度を4段階（いつもある　ある程度ある　たまにある　まったくない）で回答し，それぞれに想い起こした育児事情の自由記述を求めた	父親が育児中に感じられる肯定的な情動の中心は「同情」，「安心」，「誇り」，「希望」であり，次いで「感謝」があげられ，「喜び」，「愛情」は少なかった。 また，情動の頻度と記述件数とは必ずしも一致しなかった。 育児幸福感を感じる際の育児事情は12項目に分類でき，主としたものは「子どもの成長・発達・健康」および「子どものしぐさ」など子どもを中心とした構成であり，子どもとの関係の中で育児幸福感が認められた。 育児に対する信念が今後もかわらないと信じることが育児幸福感とわずかながら関係しているが，育児幸福感に影響する要因は他にあると考えるべきである。	明らかにされた父親の育児幸福感とその育児事情に着眼し，肯定的な情動を喚起する働きかけが重要となる。
⑥	川上あずさ 牛尾禮子	乳幼児をもち，妻が就労している核家族の父親10名	面接調査（半構造化面接） 内容は「父親として育児に参加する時の気持ち」	父親の「役割意識を高める要因」として，「子どもをもつことの期待」，「子どもとの関わりが増えた」，「生活を子ども中心に考える」等の7つが見い出された。 「役割意識を阻害する要因」として，「子どもに関わることが少ない」，「子どもの世話は母親が行うもの」等の4つがあった。	今回は子どもと父親の関わりを中心に進めたが，子どもの発達や生活環境も検討課題である。
⑦	谷野祐子 小野恵美 朝比奈七緒 他	1ヵ月児健診で来院した父親99名父親にとって第一子に該当する子どもの父親	質問紙調査 1．基本的属性 2．5項目の育児技術に関して，産前・産後教育受講の有無 3．育児指導が影響を与えると考えられる育児・児への感情とし4項目もうけ，退院時と比較した変化について4件法で尋ねた	1．育児態度は産前・産後教育の効果がみられなかった。 2．育児技術実施状況は産前教育を受講した父親では，産後教育を受講した父親のほうが育児技術を実施しているが，産前教育を受講しなかった父親では，産後教育の効果はみられなかった。	父親の育児参加を高めるためには，産後の育児指導を受講するだけでは効果不十分であり，産前からの継続的な受講が有効であることが示唆された。

Presented by Medical*Online

表2-2　父親の育児に関する現状と研究の課題

文献No	著　者	研究の対象	研究方法	結　　果	研究の課題
⑧	小西秀代	育児サークル（2～5ヵ月，6～12ヵ月）に参加した乳児の父親90名	質問紙調査 1．フェイスシート　本人，妻，子どもの情報，本人の生育歴，育児参加の状況など 2．育児項目　育児参加の意欲に関する質問が12項目，実際に育児を行ってみて両親学級などで必要と思う育児指導内容に関する質問26項目。各項目に対して「ない」，「あまりない」，「少しある」，「おおいにある」の選択肢から選択してもらう	父親の育児参加意欲には「労働条件や疲労感」，「夫婦のコミュニケーション」が関連していること。実際の育児参加には「自己の父親の育児」，「家族形態」が関連していることが示唆された。「夫立会い分娩」についての育児意欲への関連では，育児経験のないものはその影響を認めていないが，参加経験のあるものは影響を認めていた。育児指導に対するニードでは，「緊張時の対処」，「妊娠中のサポート」，「他の父親との交流」が高く，いくつもの項目で両親学級の参加経験，育児参加状況，年齢などの相関が認められた。	学級のみでなく，産褥の入院期間に面会に来ているとき，地域では乳児健診の際に，意識して有効に父親，家族との関わりをもっていくべきである。
⑨	蛭田由美 寺内文敏 平山宗宏	製薬会社4社における子どもを持つ男性社員各50名。計200名	質問紙調査 1．著者らが作成した質問紙による父親の生活意識，子どもとの関わり，子育て支援についての要望等の調査 2．大日向が開発した愛着尺度による妻および子どもに対する愛着の測定 3．アンドロジニースケールによる男女両性具有性の測定	年代が若いほど休日を家族と共に過ごすという割合が高かった。 年代が若いほど子どもとの関わりは積極的であった。 妻および子どもに対する愛着は，父親の年代が若いほど強く，年代が上がるにしたがって弱くなる傾向がみられた。アンドロジニースケールからは，性格特性として男性性が高い父親は子どもとの関わりや子どもの興味や関心についての理解が低いという傾向がみられた。父親が望む子育て支援策は「教育制度・内容の改善」，「税の優遇制度」，「子育て環境の整備」であった。	父親の働き方の改善，子育てのための経済的支援，企業・職場の子育て支援の取り組みを勧奨・評価するシステムなど社会的支援策が必要である。
⑩	田中恵子	正期産の分娩をした産褥の夫201人	質問紙調査 1．花沢の対児感情評価尺度。接近感情項目，回避感情の計28項目。評価は0～3点までの4段階 2．花沢の育児動機評価尺度。14項目。評価は0～3点までの4段階 3．分娩の感想（自由記述）	1．父親の子どもに対する感情は，分娩方法の影響が強く，正常群は帝王群よりも接近感情得点が有意に高かった。 2．接近感情得点と回避感情得点との相克度を示す拮抗指数は，予定帝王群が緊張帝王群よりも有意に高かった。 3．分娩方法にかかわらず接近感情得点と育児動機と得点は有意な正の相関があった。	家庭の原点である分娩より，両親との紐帯が確率できるような働きかけについて今後も検討する必要がある。
⑪	根本さや香 新山陽子	治療を必要としない早期新生児の父親	質問紙調査 1．愛着については日本版MAI尺度（以下MAI-J）の5因子26項目で構成されている。回答は4段階。ベビーマッサージの実施前後に測定 2．ベビーマッサージの手技の難易度，楽しさなどに関する3段階評価と感想の自由記載	1．ベビーマッサージによるいい親の愛着得点が有意に上昇した。 2．早期新生児期に父親がベビーマッサージを行うことは，わが子との時間や気持ちの共有に対して効果がある。	対象者が少なく，一般化には限界があり，分娩様式，分娩立会いの有無，ベビーマッサージを実施した日齢などの比較がされておらず，検討する必要がある。
⑫	樋貝繁香 遠藤俊子 比江島欣慎 他	関東近辺の医療機関（9ヶ所）で出生した，生後1ヵ月の子どもをもつ父親592名	質問紙調査 1．基本的属性 2．子どもの出生時の状況 3．産後うつの尺度はエジンバラ産後うつ病自己評価尺度（以下EPDS）10項目で0～3点の4件法とCES-DS 20項目で0～3点の4件法で回答 4．関連要因として，安達が作成した職場環境，職務内容，給料に関する満足感測定尺度23項目の1～4点の4件法	父親がうつ状態であった。 産後うつとの関連要因は，職務内容や職場環境，給料であり，子どもの出生時の状況との関連は認められなかった。	父親への精神的サポートは，親としての自信がもてるアプローチの必要性が示唆された。
⑬	柳原眞知子	山梨県内の乳幼児（0～3歳）を持つ父親556名	質問紙調査 1．対象者の背景　年齢，児との接触時間，妻の就業等 2．父親の育児参加実態と意識　1）父親の育児参加状況は4段階で回答。育児内容は，恒次欽也らのを参考に4項目作成。2）父親の育児参加は4段階で回答。3）妻の相談に応じているかは4段階で回答。4）父親が相談したいと思う内容　等 3．父親の育児参加を妨げる要因　丹羽洋子の調査項目を基に11項目作成。5段階評価 4．父親の育児ストレス　加藤道代，津田千鶴が母親用に作成した「育児ストレス測定尺度」18項目を父親に置き換え使用。5段階で回答 5．父親が育児をしていく上で必要と思うサポート　自由記述してもらう	1．育児参加約7割，家事参加約4割，と育児への参加が多く見られた。 2．約6割の父親が妻の相談に応じていた。 3．父親の育児相談の相手は妻とする人が約6割であった。 4．父親の育児参加を妨げる要因として，仕事が忙しい，休暇がとりにくいといった時間的，社会的なことが要因であった。 5．父親の育児ストレス得点の平均は「否定的育児行動」に関する得点が高く，「育児肯定感」に関して，育児に肯定的であった。 6．必要な育児サポートの希望として，育児時間の保証が多かった。	価値観が多様化する時代にあって，ニーズに応じていくためには，日々父親ニーズを把握していかなければならない。
⑭	岡本絹子	1歳6ヵ月児をもつ父親215人	質問紙調査 1．父親の属性 2．育児参加状況，日常生活ストレスの有無　「仕事の遂行」，「自分の時間の不足」等10項目。4段階での回答 3．育児に対する考え　「育児よりも仕事優先」，「仕事より育児優先」，「両方とも平等に関わる」の3項目から回答 4．父親としての自己評価（100点満点中で自己採点）	1．父親が子どもとかかわる時間，夫婦の会話時間は「1時間～4時間未満」は半数を超えて多かった。 2．育児に対する熱意は十分と考えている父親が多かったが，育児にかかわる時間については不十分と考えている父親が多かった。 3．日常生活で仕事や時間に関してストレスを感じている父親が多かった。 4．父親としての自己評価の平均値は100点中61.5点であった。 5．父親としての自己評価は，平日に子どもと関わる時間，夫婦での会話時間との間で有意な関連性が認められた。	育児中の父親は様々な役割をもちながら生活していることを考慮した父親の精神的健康に対する検討を行っていかなければならない。制度の整備は，父親自身に対してと同時に社会全体に対する働きかけが必要と考える。育児中の夫婦は時間的にも夫婦での会話がしづらい状況なので，意識して夫婦での対話を図っていくようにお互いに努力していく必要がある。

Presented by Medical*Online

表2-3　父親の育児に関する現状と研究の課題

文献No	著　者	研究の対象	研究方法	結　　果	研究の課題
⑮	岡本絹子	1歳6ヵ月児をもつ父親368人	質問紙調査 1．父親の属性 2．父親としての自己評価　(100点満点) 3．抑うつ症状の測定　Zung自己評価式抑うつ尺度　20項目。4段階の回答を重い順に4～1点 4．育児項目別の父親の育児参加に関して「子どもとの遊び」,「入浴の世話」等6項目の実施について有無 5．育児への参加に対する認識は,「育児にかかわる時間」,「育児に対する熱意」について「十分」～「不十分」の4段階で回答 6．育児ストレスの有無は,矢澤らの日頃父親が感じるストレスについて「仕事の遂行」,「自分の時間の不足」等の10項目について,ストレスが「よくある」～「ほとんどない」の4段階で回答	父親としての自己評価得点との間で有意な差が認められた項目は①「抑うつ症状」②育児や夫婦にかかわる時間のうち「平日に誰かと子どもの相手をする時間」,「平日に夫婦で会話する時間」③育児参加に対する認識のうち「育児にかかわる時間」,「育児に対する熱意」④父親の生活上のストレスのうち「育児が思うようにいかない」,「親としての自信がもてない」,「妻との会話は不足している」,「仕事が思うようにいかない」であった。	育児のパートナーである父親の抑うつ症状にも関心を向けてさらなる検討が必要。父親は育児に参加し父親として評価を高めるために,社会全体での取り組みを推進していかなければならない。育児パートナーである母親との関係や母親の父親に対する評価等の検討をも加え,父親の自己評価を高める取り組みについての考察を深めていく必要ある。
⑯	木村弘子 星田秀子 菊池千代子	両親学級に参加した夫39名	質問紙調査 1．属性 2．夫の教室参加動機 3．各期の指導項目評価　受講前後ともに「非常に期待している」～「全く期待していない」の4段階評価	1．出産に付き添う夫は，妻との出産体験の共有のために助産師からの看護援助として夫への精神的サポートや役割の提示，分娩過程や進行状況の説明を求めている。 2．出産に付き添う夫は，助産師との関わりを精神的に居心地良いと感じることや助産師の存在を意識することで安心感を抱いている。 3．夫の求める助産師の関わりとは夫の出産体験をバースレビューなどのフィードバックによって肯定的な自己像へと転換していくことであり，それは妻との出産体験を共有できたという夫の自尊感情を高め，育児動機の発達，親役割の獲得につながる。	子どもを迎え入れる家族の新たなスタートを意識して関わり続ける必要がある。
⑰	岡本絹子	1歳6か月児をもつ父親368名	質問紙調査 1．父親の属性 2．抑うつ症状の測定にはZung自己評価式抑うつ尺度を用いた。20項目を4段階で回答 3．日常生活習慣の測定には宮地らの健康生活習慣項目のうち「喫煙」,「間食」に関してBreslowらの健康習慣をもとに選択肢を一部修正したものを用いた。12項目で,健康にとって望ましい習慣への回答1点，望ましくない習慣への回答0点とした。 4．日常生活でのストレスの有無は「仕事が思うようにいかない」,「自分の時間が持てない」等の10項目を「よくある」～「ほとんどない」の4段階で回答 5．育児への参加意識は「育児に関わる時間」,「育児に対する熱意」について「十分」～「不十分」の4段階で回答	抑うつ得点が40点以上の抑うつ症状を有する父親は半数を超えていた。 普段の生活の中で仕事や時間に関してストレスを感じている父親の割合が高く，抑うつ得点との間で有意な関連性が認められた。 父親の日常生活習慣との関連では，日常生活習慣得点の高いほど抑うつ得点は有意に低くなっており，生活の規則性，食習慣，運動習慣において有意な関連性が認められた。	父親の精神的健康に関連する要因について検討を積み重ね，育児中の父親に対する具体的な支援方法の模索をしていかなければならない。
⑱	永森久美子 堀内成子 伊藤和宏	少人数参加型の出産準備クラスを受講した初めて父親になる男性6人	面接調査（半構成的面接法） 「クラスに参加している時どのようなことを考えたか」,「出産あるいは育児を実際に体験して，クラスでの体験はどのようなものだったか」など出産前，出産後のそれぞれに時期をあわせて質問。1研究協力者に対し3回面接を行う	クラスに参加した意味として,「妊娠や出産を自分の中で再構築し，自分のこととして取り組んでいく」,「夫婦二人で体験を共有するというプロセスから得られる満足度」,「親になっていく過程で自信を付けていく」等の共有した体験が見い出された。	記述なし
⑲	高瀬佳苗 河口てる子	平成11年1月～6月に出生した子どもをもつ父親196名	質問紙調査 ①属性②調査対象者の実父の子育て17項目③直接経験7項目④育児情報7項目⑤両親学級に関する項目4項目⑥育児の共同化意識8項目⑦妻への配慮10項目⑧子ども好き8項目⑨子どもへの配慮10項目⑩対象者の育児行動18項目　「全くしない」,「たまにする」,「時々する」,「よくする」,「いつもする」の5段階の順序尺度	1．子どもの数が多くなると対象者の育児行動は少なくなる。 2．育児に関する学習は，育児に関連した態度と弱い関係があった。 3．育児に関する態度と対象者の育児行動には，やや強い関係があった。 4．育児に関する学習と対象者の育児行動は，弱い関係があった。 5．対象者は，実父がしていた家事行動を学習し，同じような家事行動をしていた。また，実父との直接経験が対象者の子ども好きの感情に影響を与えると推測された。	看護者が父親に対して育児に関する看護を提供する場合,父親への働きかけの視点として,妻への配慮の気持ちと育児の共同化意識をもち,かつ,父親が,出生後の子どもや育児行動そのものに対して肯定的な感情を抱けるように工夫した学習方法でアプローチする必要がある。
⑳	蛭田由美 平山宗宏	首都圏を中心とした勤労者家族の父親777名	質問紙調査 1．①対象の特性として，年齢，職種　等 ②家庭生活と仕事として，結婚年数，子どもの数　等 ③子どもとの関わりとして，出産の立会いの有無，日頃の子どもとの関わり　等 ④子育て観，家族観として，子どものしつけ，養育について妻と意見の相違がある時の対応　等 2．妻および子どもに対する愛着の測定として，愛着尺度は大日向により開発されたもの18項目に対して4段階で回答	年代の若い父親は，子どもや妻への愛着が強く，家族関係は親密であった。しかし，疲れやすくゆとりがない。子育て支援としては,経済的支援と休暇やゆとりを望んでいた。 父親の年代があがるに従って，子どもや妻への愛情は弱くなり，子どもや家族との関係は希薄になる。父親としての役割を感じながら，仕事に打ち込んでいる。子育て支援として教育問題で支援を望む声が多くなった。	今後，被雇用者の一般を代表するようなサンプルを抽出できるように，対象の職業・職種を広げた追試を行う必要がある。 少子化や子どもの健全な発達のための対策は，保健医療福祉の分野だけでなく，広く，労働，経済，教育などの多くの分野の学際的な研究が必須の課題である。

Presented by Medical*Online

表2-4　父親の育児に関する現状と研究の課題

文献No	著　者	研究の対象	研究方法	結　　果	研究の課題
㉑	小野寺美紀子 吉田弘美 高野京子 他	6ヶ月以上の育児経験を持つ父親225名	質問紙調査 家族形態，子どもの人数，職業，育児休業について，主に育児に協力してくれる方，父親としての実感がわいてきた時期，育児に関心があるか，興味のある育児と実際に行った育児について，育児について学んだ場所，妻のサポートについて工夫した点，，育児に関しての満足度評価，父親の育児参加は必要であると思うか，幼少の頃，父親と遊んだ経験，自分が理想とする父親像について，育児について社会に望むこと	1．育児に対する関心は高く，基本的な育児参加が高くなっている。 2．夫の育児休業取得を含めた法の改正はされたが，取得率は極めて低い。しかし，育児休業が取りにくい状況の中，妻のサポート・育児に積極的に協力している。 3．核家族が増えている現状，育児相談や夫の参加を含めた育児サークルなどの支援が必要である。	さらなる実態調査をし，育児環境の向上を目標に保健指導を進めていきたい。
㉒	江口麻衣 畝本玲子 緒方美也子 他	4か月児健診を受けた児の父親配布数550部	質問紙調査 1．対象者の属性 2．1）父親の幼少期からの体験2項目 2）夫婦のコミュニケーション2項目 3）妊娠・出産時の夫婦の協力6項目 4）母親の満足度に対する父親の認識1項目 5）母親への情緒的支援8項目　「よくしている」～「ほとんどしていない」の4段階回答	情緒的支援を積極的に行っている父親は，幼少期から父親や乳幼児とのふれあいを体験しており，また，育児において夫婦で協力し，良好なコミュニケーションがとれていることが明らかになった。幼少期からの父親や乳幼児とのふれあい体験は，父親となる全段階において必要なものを育む等。	夫婦が相互に積極的な情緒的支援を継続されていくために，生涯を通して親性を育んでいけるように第1子や初産婦のみに焦点をあてるのではなく，育児を全般的にサポートすることが必要。また親性を育むために，家庭・地域・学校が連携し，生涯を通して支援していく体制を整えていくことが望まれる。
㉓	鈴木紀子 久納智子 藤原　郁	育児休業を取得した男性1名	面接調査 育児休業取得後1か月，3か月，6か月，9か月，11か月（育児休業終了後）の時点でインフォーマル・インタビューを実施	1か月「子育ての苛立ち」，「自尊感情の低下」等，3か月「周囲のサポート」，「子育ての楽しさ」等，6，9か月「子どもの成長・発達への不安」，「同じ立場の友だちがいない」等，11か月「子育ての自信」等のカテゴリーが得られた。	男性だからこそ悩み困ることがあることを理解し，友だちづくりやサポート体制を広げることが必要である。
㉔	大石百合子 鈴木かおり 鈴木さきゑ	母子同室を行った褥婦の夫	質問紙調査 母子同室を行った父親に児との触れ合い，退院後約1か月の育児・家事・精神面における育児行動についてアンケート調査 家族構成，子どもの数，立ち会い分娩の有無，出産に関する休暇制度について，入院時の面会，入院中に児と触れ合ったことでよかったこと，母子同室になった時期，入院中から児と触れ合う機会について，里帰り中，児と会う機会について，産後1ヶ月以内で協力したこと（育児面，家事面，精神面），育児協力参加の比較	1．児と早期接触ができるよう環境の場を与えることは，スキンシップ行動から父親の役割意識へつながっていくため効果的 2．父親の育児参加協力を促していくためには，父親学級や個別指導の充実を図るなど，外来部門や他施設との情報の共有化・連携を図っていく必要がある。	父親の育児参加協力を促していくためには，父親学級や個別指導の充実を図るなど，外来部門や他施設との情報の共有化・連携を図っていく必要がある。
㉕	Yumi Hiruta Yumi Cho Eiko Nishino	日本人の父親100名，在日韓国朝鮮人の父親74名	質問紙調査 1．家での父親の生活　(1) 家族と休日どのように過ごしているか (2) 平日，家で過ごした時間の長さ (3) 平日，育児にかけた時間の長さ (4) 妻の仕事時間 2．子どもとの関係　(1) 子どもたちとの日々の関わり（朝食，買い物，会話等），(2) 家での育児の役割の共有 (3) 子どもたちとの関係 3．育児や父親として理想についての考え方　(1)父親が育児をすることに対する男性と女性の理想　(2)父親に対する自己像　(3)子どもをだっこするときの父親の印象 (4) 育児に対する見解 4．父親の子どもに対する愛情の測定　花沢の開発した尺度を用いた。愛情を注ぐ項目が14項目。愛情を回避する項目が14項目。回答は「その通り」が3点，「その通りではない」が0点と得点化し，得点により4つのカテゴリーにランキングした	1．家庭生活全般にわたって，日本人と在日韓国人の父親に大きな違いはみられず，子育ての多くを母親が担っていた。 2．日本人は在日韓国朝鮮人に較べて，子どもとの関わりは多いが心理的な距離感を持っている父親が多かった。 3．在日韓国朝鮮人は日本人に較べ，子どもとの関わりは少なかったが，子どもとの心理的な距離感を持つ父親は少なかった。 4．在日韓国朝鮮人3世は2世に比べて子育ての積極的であった。 5．在日韓国朝鮮人は儒教精神を受け継ぎ，儒教的家族における確たる父親像をもっていた。 6．日本人は明確な父親像を持たず，新しい父親像を模索していると推測された。	日本人，在日韓国人の父親共に以前より育児に関わるようになってきているが，さらに関わっていく必要がある。在日韓国人に対する育児サポートは将来に対しての主題となる重要なものである。外国の民族性を考慮した在日韓国人に対する育児サポートの研究を続ける必要がある。日本人，在日韓国人にかかわらず，健康や福祉のサービスを改善していきたい。
㉖	木村　薫 白井やよい 中村マリ	平成3年1月～平成4年12月に正常分娩した，第1子の父親107名	質問紙調査 1．対象者属性（父親の年齢，母親の年齢，児の月齢，夫立会い分娩の有無，妻の妊娠を知ったときの気持ち，父親と実感した時期　等） 2．育児参加状況「よくしている」～「していない」の4段階で回答，参加理由，育児開始時期，育児内容11項目について「よくしている」，「時々している」，「していない」の3段階で回答 3．育児参加の程度と関連要因について	1．退院直後からの育児参加群に有意に育児参加が高い。 2．父親の育児参加は，少なくとも母親の代行ではなく遊びの要素が多い。 3．夫立ち会い分娩をした夫に，育児参加の得点が高い傾向にある。 4．立ち会い分娩の父親は，妊娠早期より，父親としての実感を持つものが多い。	早期より父親が育児に参加できるよう，分娩後より母子だけでなく父子がかかわりをもてるよう援助することが必要ではないかと考える。
㉗	真鍋えみ子 藤田峰子	育児休業法制定前に当院で出産した1年未満の乳児を持つ父親344名	質問紙調査 対象者の背景（子どもの数，夫婦の年齢，家族形態，職業，労働形態，出勤・帰宅時間，通勤時間を含めた労働の拘束時間　等），核家族における家事協力，夫の育児行動（育児方針の決定権，育児行動）	1．家族形態は核家族が75.5%，拡大家族が24.5%であった。 2．夫の職業は常勤が76.4%を占め，勤務形態は「規則的」83.3%で，勤務時間を含めた就労時間は平均12時間であり，子どもに接する時間の確保が物理的に困難であった。 3．家事協力では「子どもの入浴」が最も高く，第1子80.0%，第2子70.4%であった。炊事・掃除・洗濯の協力状況は低かった。 4．育児行動に関しては「一緒に遊ぶ・抱く」93.1%等で何らかの形で育児に参加していた。以上のことから，夫の日常的な家事・育児への参加は低く，性別役割分業は進展していないと思われる。	今後の両親学級を取り入れる方向で考えていきたい。

Presented by Medical*Online

研究の結果の適応範囲を拡げるために，地域の特徴や労働条件の異なる父親を対象とした研究の必要性が示唆された。

2．父親研究における今後の課題

父親が育児に関わる必要性について，青木[23]は父親の育児不参加による子どもの成育の大きな影として，拒食･過食症などの摂食障害，不登校や引きこもりを，神原[24]は虐待予備軍である保護者の実態として，虐待の傾向は夫婦関係や子育てに対する夫の協力度，子育て不安との関連が高いと報告している。これらのことから，父親が母親の助手にとどまっているだけでは全く足りず，母子関係とは別に父親独自の父子関係を形成することが必要であると考える。つまり，父親は「もう１人の母親」ではなく，「もう１人の男親」として育児に関わる必要があると考える。しかし，先行研究における課題で，どのような父親になりたいのか，またそれを子どもにどのように示すのかが不明であるとされている。このことは，現在子育て真っ最中の世代が産まれた頃，「夫は外で働き，妻は家庭を守るべきである」という考えに対し，男性も女性も８割以上の人が「賛成」と答えていたことと関係しているのではないかと考える。つまり，現在子育て真っ最中の父親が子どもの頃，まだ家庭は女性が守るべきものという常識があり，実際に自分が育児をしようとした時に父親モデルがいないため，父親の理想像や子どもとの関わり方がわからないのだと考える。

小児看護領域の看護業務基準の中の１つに，家族の自責・育児への不安・ストレス・育児困難が生じないよう調整することが援助としてあげられている[25]。しかし，現状において家族の一員である父親は，前述した研究対象者や方法などの理由により母親側から捉えられた概念で育児不安を考慮されることが多い。また，今後父親の育児が増加することが予測されるため，父親の自責・育児への不安・ストレスに関して母親の概念ではなく父親独自の視点によって構築される必要性があると考える。なぜなら，夫婦の育児に対する思いには違いがあること[17]や育児ストレスの内容が異なること[18]が報告されている。また，岩田らは，父親の育児ストレスの実態，育児観と育児ストレスとの関連について，十分解明されていないと報告しているためである[26]。

これらのことから，現在の父親は育児に関して社会的期待を受けているが，実践の父親モデルを持っていない状況である。この父親を対象とした研究において，育児に関わる必要性が論じられているが，父親がどのような育児観を持ち育児しているか，また育児観と育児不安・育児ストレスなどとの関連は論じられていない。このため，質的研究により父親の育児観を明らかにし，父親の理想像･役割･子どもとの関わり方･育児ストレスについて明らかにする必要があると考える。

最後に最新の課題として，渡井は男性・女性の労働者は仕事と家庭との両立葛藤はメンタルヘルスに悪影響を及ぼすと指摘している[27]。今後は，ワークライフバランスの観点も重視し，従来の地域保健における母子保健施策からの支援のみならず，企業や職場を巻き込んだ産業保健と連携した子育て支援が望まれると考える。

Ⅵ．おわりに

本稿では，わが国の近年の父親研究における動向を把握し，育児をめぐる社会的な環境を踏まえて，父親の主体的な育児を支援するために必要な父親研究における今後の課題を検討した。

今後の課題として，本稿の研究動向を踏まえ，父親の育児観を実証的に明らかにするために，地域の特徴や労働条件の異なる父親を対象とし，質的研究への取り組みが必要であると考える。

この研究は，科学研究費助成金（課題番号：20791721，研究者：牧野孝俊）によって行われた研究の一部である。

文　献

1) 厚生労働省編．厚生労働白書．東京:(株)ぎょうせい，2006：55.
2) 堀田法子，山口孝子．６ヵ月児をもつ母親の精神状態に関する研究（第２報）．小児保健研究　2006；64(1)：11-17.
3) 藤原千恵子，日隈ふみ子，吉田絹子．乳児を持つ父親の養育態度の形成に関する研究．日本看護学会集録（小児看護）　1994；25：129-132.
4) 中津川明子，川島綾子，土屋康子，他．父親への育児参加を考える．栃木母性衛生　2001；28：35-37.
5) 奈良間美保．系統看護学講座専門22　小児看護学1.10．東京：医学書院，2003：6.

Presented by Medical*Online

6) 庄司順一．わが国における父親研究の動向．小児保健研究　1993；53（2）：203.
7) Muller ME. A questionnaire to measure mother-to-infant attachment. Journal of nursing measurement 1994；2（2）：129-141.
8) 中島登美子．母親の愛着尺度日本語版の信頼性・妥当性の検討．日本看護科学学会　2001；21：1-8.
9) R Lazarus, S Folkman, 本明　寛，他訳．ストレスの心理学．実務教育出版．1996.
10) 本明　寛．Lazarus のコーピング（対処）理論．看護研究　1998；21（3）：17-22.
11) 花沢成一．母性心理学65．医学書院　1992：94.
12) 岩田裕子，森　恵美，前原澄子．父親役割への適応における父親のストレスとその関連要員．日本看護科学学会誌　1998；18（3）：21-36.
13) 大日向雅美．母性の研究．川島書店　1988：201.
14) Cox JL, Holden JM, Sagovsky R. Detection of postnatal depression. Development of the 10-item Edinburgh Postnatal Depression Scale. British Journal of Psychiatry 1987；150：782-786.
15) 岡野貞治，村田真理子，増地聡子，他．日本語版エジンバラ産後うつ病調査票（EPDS）の信頼性と妥当性．精神科診断学　1996；7（4）：533-535.
16) 石田直美，川邊喜美，米田佳代，他．低出生体重児の親の育児不安に関する文献研究．兵庫県母性衛生学会雑誌　2006；15：80-86.
17) 上田恵子，石井京子，羽座典子，他．妊娠末期から出産1ヶ月後における夫婦の育児に対する認識の比較．日本看護学会論文集（母性看護）　2005；36：101-103.
18) 宮本政子，猪下　光．乳幼児を養育する父親と母親の育児ストレスと関連要因．香川大学看護学雑誌　2006；10（1）：15-23.
19) 佐野和香，我部山キヨ子，池田浩子，他．現代日本における父母の育児観とその影響因子に関する研究．母性衛生　2002；43（2）：387-394.
20) 服部律子．ハイリスク児の両親の養育態度に関する研究．家族看護学研究　2001；7（1）：9-15.
21) 宮本政子．乳幼児を養育する母親および父親の育児支援に関する研究．小児保健研究　2008；67（5）：729-737.
22) 加藤春子，国村美由紀．八矢幸美．他．第3子以上を出産した親の諸要因の検討　地域差の観点を中心に．母性衛生　1999；40（4）：383-390.
23) 青木信人．子育てにいまこそ父親の力を．ジャイロス　2004；2：166-178.
24) 神原文子．“虐待予備軍”である保護者の実態と子育て支援の課題．子どもの虐待とネグレクト　2006；8（1）：60-71.
25) 日本看護協会．小児看護領域の看護業務基準　1999．社団法人日本看護協会.
26) 岩田裕子，森　恵美．父親役割への適応を促す看護援助に関する文献研究．千葉看護学会会誌　2004；10（1）：49-55.
27) 渡井いずみ．ワークライフバランスを実践する．産業精神保健　2008；16（4）：219-223.

Presented by Medical*Online